

被召ければ何事やらんと、早速御前へ出られければ、大將つゝ立上り、やア景勝、汝が手に屬せし花房助兵衛、我をさみする無禮之惡言、にくき匹夫めはやく召捕、逆磔にあげよ、用捨しては、汝共にゆるすまじと、おどり上りての、玄り玉へば、上杉大きに恐れ、私義は御前にて、御能拜見仕、助兵衛不禮いさゝか不奉存、上意を承り驚入、言語を絶し候、乍憚罪を糺し候はんと、御前を退き、二丁程歸りかゝりし所、追々呼つけたれば、景勝恐怖して、助兵衛が惡言故、我も御咎を受んかと恐入て、御前江出ければ、御機嫌宜しく、助兵衛不届とは云ながら、我等に向ひて、云にもあらねば、首を刎て、諸人之禁にすべしと被仰出、かしこまり御次まで退し處、又々景勝を召るはつと立戻り平伏す、太閤玄ばらく御工夫之體にて、助兵衛義浪人ものにて、此節其方が手に屬したりとも、家來といふにも非ず、誹謗之罪にて、首を切らん事をゆるし、武士之義を立、切腹申付べしと宣ふ、景勝少し心を安んじて退出す、跡にて秀吉公猶も御工夫有之、又々景勝を召れる、景勝立もどり罷出しに、大將これへと近く召れ、我つくゞおもふに、助兵衛が言葉、理之當然也、陣中にて能興行せしは、我威勢つよく、敵を恐ざる事をたのしみ、北條方之者ども、驚かせんためなれば、あながち慰みといふには非ず、然れども大敵を恐ず、小敵をあなどらずとは、軍中之禁也、爰を以、花房が惡言、不届とは云ながら、大名旗本數千人、我をおそれ、詞を出すものなきに、本陣に睡を仕かけ、大將は酒狂か、亂心かとの荒言は、たぐひもなき器量者也、古青砥左衛門藤綱○中略おどらぬ花房、我をさみせし器量、誹謗の罪をゆるすべし、今より其方が軍師同前におもい、おもくもてなし、幕下にすべしと、打て替りし御機嫌に、景勝はじめ、有あふ諸侯、誠に大器之大將かなと感じあへり、諸こそ景勝は、花房を尊敬し、小田原攻に武功をあらはしけるが、後に至て、直江山城と不和になり、上杉家を離れ、家康公の御家人となり、子孫繁昌也。

〔近代正說碎玉話三〕伊達左京大夫政宗二十四歳、小田原ノ陣ニ來リテ、臣從センコトヲ求ム、諸將